

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 中山 智香子



学位申請者 大槻忠史

論文名 赤松要の雁行形態論とその展開 —在名古屋時代と段階論的視座

【審査の結果】

2010年10月10日、中山智香子が主査をつとめ、学内からはロシア語圏の経済理論・経済思想を研究する鈴木義一教授、日本思想史を専門とする米谷匡史准教授、東南アジアをはじめアジアの経済発展論や経済史を研究する宮田敏之准教授、学外からは経済学史に幅広い業績があり、日本経済思想史にも造詣の深い摂南大学教授八木紀一郎教授をお招きし、合計五名から成る審査委員会で、上記論文の審査ならびに最終試験を行った。

本論文は、赤松要の雁行形態論について、これまで先行研究のほとんどなかった経済学史の分野において考察し、その着想と理論形成の源泉を、名古屋高等商業学校在任中の赤松の研究活動に求める一方で、赤松の世界経済論である「異質化」・「同質化」の概念を雁行形態論からの理論的發展と位置づけ、ここに含まれる段階論的視座を、相前後する時代のN. コンドラチエフ、F. リストの経済思想との比較対照から浮き彫りにしつつ、さらに第二次大戦後のロストウやガーシェンクロンの発展段階論との関わりにも目配りをした、意欲的で独創的な論文である。論文の審査、および申請者の報告と質疑応答から成る最終試験の結果、審査委員会は全員一致で申請者に対し、博士（学術）の学位を授与するのがふさわしいとの結論を得た。

【論文の概要】

本学位論文は、第一部「雁の誕生そして旅立ち」、第二部「雁の再飛行とさらなる広がりに」から成り、その間に「雁の小休止としての中間地」という論考、最後に二つの補論を付すという構成をとっている。第一部は第一章から第八章までの八章、第二部は第十章、第十一章、第十二章の三章から構成されている。補論1は、オランダの経済学者S. デ・ヴオルフの経歴及び大循環研究について紹介し、第一部で赤松要の雁行形態論と比較されるコンドラチエフの景気変動論の特質を、より明確にする役割を果たしている。また補論2は赤松要の経歴を概観し、おもに本論で考察の対象としない赤松自身の神戸高等商業学校時代および東京高等商業学校専攻部経済科時代や戦後の活動について紹介することで、日

本でほぼ唯一の評伝とされる池尾愛子『赤松要 一わが体系を乗り越えてゆけ』（日本経済評論社、2008）を補足し、かつ本論で扱った時代を取り巻く赤松要の全体像を描くものである。

第一部は、まず一九二〇年代前後の日本における商業教育の展開とその中で名古屋高等商業学校の位置づけ（第一章）、そこでの赤松要の役割（第二章）を検討し、赤松がドイツ留学後に赴任先の名古屋高等商業学校の要請でアメリカにわたり、そこで学んだハーバード大学でのケース・メソッドや景気研究所の統計的手法を参考にしながら、名古屋高商に「産業調査室」を開設して、ここを母体として愛知県尾西地方の羊毛工業の発展を分析したことが、雁行形態論を着想する起源となったことを明らかにする（第三章）。これらの部分は雁行形態論誕生の前史にあたる部分であるが、従来の日本経済思想史においては、いわゆる帝大を拠点とした研究動向のみに関心が向けられがちであったのに対して、むしろ実業の要請と深く関わってきた高等商業学校と当時の工業化政策の関連を指摘し、経済史・統計的研究のなかに理論の源泉を見る点がユニークである。

第四章、第五章は本論文における理論史的中心部分である。第四章は、一九三〇年前後の赤松の諸論考から雁行形態論の誕生を精査する。特にここでは、雁行形態論のプロセスが、前史で述べた経済史的背景のみならず、ドイツ留学時代に学んだ弁証法によって説明されていることを強調する。この点はさらに、一九三〇年代後半に至る頃までには赤松が、みずからの世界経済論をも総合弁証法で説明しようとしたという指摘（第八章）へと連なっている。赤松の世界経済論とは、雁行形態論を基にしながら戦争を含む景気変動プロセスを説明する「異質化」と「同質化」の理論（第五章で詳説）であるが、本論文はそこに、コンドラチエフの景気変動論あるいは大循環学説（第六章）の受容と批判的乗り越えを見出している。そこで、この点における赤松の独自性を確認するべく、一九三〇年代当時の日本における大循環、長期波動学説の受容（第七章）という時代的文脈を明らかにする。

また、コンドラチエフとの比較は同時に、本論文の後半のテーマを導出する役割を果たしている。すなわち第一部の終わり近くで、赤松の世界経済論が発展段階論の系譜の中に位置づけられるという指摘があり、続く第二部ではこれを、いくつかの発展段階論との比較から、あらためて位置づけ直している。第十章では赤松による直接の言及もあるドイツのF.リストの段階論との比較を行い、次いで第二次世界大戦後の第三世界の発展とともにあらわれたロストウ（第十一章）やガーシェンクロン（第十二章）の発展段階論との比較を行っている。本論文の最後には、ガーシェンクロンによる発展段階論一般の限界の指摘が、同時に赤松の雁行形態論の展開の限界の指摘にもなっていることが確認され、赤松要の雁行形態論の終着点が示される。

もっとも第一部と第二部は、構造的にみると、二つの間に置かれた「雁の小休止としての中間地」という考察部分によって分断されている。これは、赤松の研究活動が第二次世界大戦時の南方調査によって中断されたという歴史的な事実に対応した構造である。本論文のこの部分は、赤松が数度にわたる南方調査において何を目指し、何を行ったかを示す

ばかりでなく、実質的には戦争への強い協力を求められる戦時期の「学問的調査」において、何を行うことができなかつたかも示している。この部分は、理論史の谷間のような構造的位置を与えられているが、実はこれまで知られることのなかつた文献を発掘し、これを用いて分析を進めたものであり、学問的に貢献度の高い部分でもある。

【論文の評価と審査の概要】

本論文は、赤松要の諸論文、諸著作を忍耐強く読み解き、また当時の高等商業学校や大学の制度化に関わる諸文書や歴史的事実を詳細に調べ上げ、さらには戦時期の資料についても従来「ない」とされてきたものを探し出し、これを用いた分析を提示したことで、今後の研究の発展に寄与する、大変な力作であることが、審査委員全員によって高く評価された。また時代的文脈に目配りしながらも人物史に密着するという一貫した手法で行い、経済学史の研究を、可能な限り、その限界まで追究したことに対しても、高い評価が与えられた。

もっとも審査委員会では、こうした長所が同時に問題も含むものであることも指摘された。たとえば、雁行形態論から「異質化」と「同質化」の世界経済論へという赤松の理論的展開については、彼自身の論拠の不十分さもあり、また論理的にも飛躍があるにもかかわらず、申請者がおそらくあまりに分析対象への密着を重視したがゆえに、その欠陥を十分に指摘できなかつたのではないかということが、複数の審査委員によって指摘された。それは赤松による弁証法、総合弁証法が、これを理論的支柱としたという彼自身の信念にも関わらず、必ずしも当時の哲学における学問水準に呼応するものではなく、むしろ結果的にはレトリックとして用いられたのと同じではないかという点などについても同様である。また第二部の比較分析が、比較対象であるリスト、ロストウ、ガーシェンクロンの発展段階論については赤松の理論ほどの精緻さで読み込まれていないという非対称性ととも、赤松による「世界の同質化」のロジックが、アジア、特に中国に対しては必ずしも一貫していなかつたかもしれないこと、またたとえば第二次世界大戦後の東南アジアにおいて「同質化」は実現できなかつたことへの赤松の目配りの有無などが、疑問点として示された。

しかし申請者は本論文がこれらの問題点を抱えていることに十分意識的であり、それぞれの問いに対して、現段階で答えうる限りで誠実に回答を行い、またこれらの課題に取り組む今後の具体的なビジョンも示した。それは申請者のこれからの研究の潜在力を示すものとして、審査委員全員から好意的に受け止められた。申請者の今後の研究の発展が期待される。

以上の論文審査および最終試験により、本論文が提示した研究成果は経済学史上、十分な学術的寄与をなすものと判断され、審査委員会は全員一致により、申請者に博士（学術）の学位を授与するのが適切であると認定した。